


会員法人、民間医療機関への 物資支援中心に活動を展開する



4月14日から断続的に発生した熊本地震に対し、日本医療法人協会は全日本病院協会と協働で災害医療支援活動を展開した。本企画では現地で陣頭指揮をとられた伊藤伸一会長代行に当地での活動や課題などについてお話をうかがうとともに、初期対応の経過を報告する。

青磁野リハビリテーション病院。白鬚橋病院と全日本病院協会、青磁野リハビリテーション病院、大雄会のスタッフで打ち合わせ

15日に全日病と合同の 統括災害本部を設置

——今回、伊藤会長代行はいち早く現地入りして支援体制を整えるなどの活動に当たりました。発災からの経緯を簡単にお話いただけますか。

4月14日の1回目の大きな地震の直後に金澤知徳常務理事の青磁野リハビリテーション病院に連絡を入れました。その後も関係病院に連絡を入れたのですが、その頃はまだ地域内で対応可能との回答をいただきました。

翌15日には当協会の加納繁照会長、全日本病院

協会の西澤寛俊会長、織田正道副会長が連絡を取り合い、両団体が協力して支援にあたる事が確認され、統括災害本部が設置されました。この時点でも日本医療法人協会会員も参加するAMATなどへの支援要請もなかったことから、様子を見ることにしました。

4月16日、いわゆる「本震」が起きました。当日朝に事務局に連絡を入れて被災地の会員病院の状況確認と全国会員に対する支援の要請確認について指示しました。10時の時点で金澤常務理事からも支援要請ありましたので、まず福岡の杉健三常務理事(医療法人シーエムエス杉循環器内科病院)に連絡を入れ、

支援物資確保を要請しました。続いて、医療法人聖峰会田主丸病院の鬼塚一郎理事長・院長に連絡し、同院を支援拠点とすることをご了解いただきました。私は14時に名古屋を出発、現地に向かいました。

4月17日には物資が届き始め、熊本市の青磁野リハビリテーション病院を現地拠点と決めて支援物資の集積を開始しました。同時に熊本県内の医療法人室原会菊南病院、医療法人成仁会くまもと成仁病院に物資を分散させることにしました。

AMATが医療支援 当協会は物資支援の分担

——現地での支援活動内容について概要をお聞かせください。

まず協会会員の生命、資産の保護と入院患者への支援を最優先とし、会員の無事をあらゆる手段を使って確認、必要な支援を講じることを念頭に置いて活動しました。これは阪神淡路大震災の教訓で、物資も医療救護も公立病院、公的病院がまず優先で、かつ行政からの支援の網の目からは多くの民間病院がすり抜けてしまうことは明らかでした。つまり民間同士の助け合いが必須と考えていたのです。

民間病院が多く加盟する全日本病院協会と当協会

の協力体制が当初から機能したことで非常に大きな効果を得ました。具体的には大桃丈知院長をリーダーとする白鬚橋病院のチームがAMATとしてDMATに勝るとも劣らないスピードで現地入りし、非常に効果的な病院医療支援を展開していました。大桃先生という災害医療のエキスパートがいたことも大きいでしょう。このため協会としては医療生活物資の支援に専念することができました。

——伊藤会長代行は現地で物資網整備の指揮をとられたそうですが、具体的にはどのようなことを行ったのですか。

今回は阪神淡路大震災や東日本大震災と異なり、被害は局地的で各病院も車などを使用できる状態だったことから、杉循環器内科病院と田主丸病院から青磁野リハビリテーション病院、菊南病院、くまもと成仁病院の拠点にまで運び込みました。余力がある病院は支援物資を青磁野まで取りに来ていただき、それと合わせて各病院の状況も報告してもらう仕組みにしました。

支援する側のマンパワーも限度がありましたし、何より支援物資の量が膨大でしたから、いちいち届けるよりも効率的でした。これはかなり有効に機能したと思います。



16日、菊南病院。物資は依頼通り納品、配分されていた。中央が伊藤伸一
会長代行



18日、青磁野リハビリテーション病院。大量に支援物資が届く

状況報告については聞き取り用に「EMIS (広域災害救急医療情報システム)」に準じるかたちで項目を列挙した情報シートを作成し、それに書き込んだり、聞き取ったりしました。

各方面から多大な支援 極力負担のない形での支援法を検討

——協会会員の活動も目覚ましかったようです。

まず金澤先生をはじめとする青磁野リハビリテーション病院の皆様の献身には本当に頭が下がりました。自院の診療活動に加え、他院への支援活動にも加わっていただいたのです。なかにはご自身の家も被災されたにもかかわらず病院に詰めて医療支援活動に従事された職員もいたほどです。

福岡県の鬼塚先生、杉先生のご尽力も大変なものがありました。杉先生にはただちに2万食のパンと大量の飲料水、経管栄養用に用いるカロリーメイトを調達していただきました。とにかく大変な量で、どこから調達されたのか不思議に思ったほどです。一方、田主丸病院は支援期間中、一貫して支援物資拠点として場所をご提供いただきました。それだけでなく独自に支援物資を現地に搬送までしていただきました。さらに鹿児島からは鉾之原先生にも多量の支援物資を送っていただきました。小田原常務理事には支援物資集積の申し出をいただきました。

——伊藤会長代行が理事長を務める大雄会もDMATを派遣したほか、さまざまな活動に従事されました。

16日に私とほか事務職員2人で現地入りし、20日には看護師1人、ロジスティクス担当として事務職員2人、24日に事務職員2人を派遣しました。DMATは1チームを派遣しました。

また当法人に関係する事業者に協力を求めたところ、2リットル飲料水5万本、非常食4万食を調達していただきました。あらためて感謝申し上げます。

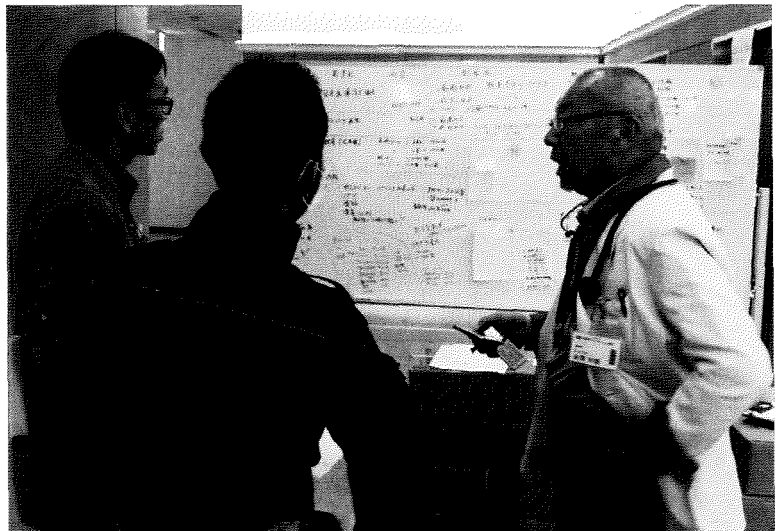
このように各方面の皆様にお力添えをいただきましたが、反省材料もあります。一つは支援体制のあり方です。今回は青磁野リハビリテーション病院に支援拠点を置きましたが、今後仮にこうした支援活動が必要な事態が起きた際は、被災病院の職員の皆様の負担をなるべく減らすためにも、やはり被災していない近隣県の病院を拠点にしたほうがいいと考えています。今後は具体的な地域分担を明確にして各地域における支援のあり方をあらかじめ決めておくべきでしょう。

支援物資についても一部の会員の皆様に負担をかける形で提供いただきましたが、今後は全会員からそれぞれの災害備蓄品のうちの20%を提供していただくといった取り決めをしておけば、支援する側も特定の病院に負担を集中させることなく、大量の支援を行えるのではないかと考えています。

このあたりは協会としてさらに議論を深め、万全の体制を整備していきたいと思います。

——ありがとうございました。

(聞き手は編集部、5月2日にインタビュー)



打ち合わせする金澤知徳常務理事(右)

緊急レポート●日本医療法人協会の熊本地震への対応

【日本医療法人協会の取り組み(4月14～23日)】

●4月14日

▽21時26分 熊本県熊本地方でマグニチュード6.5、震度7の地震発生。

▽加納繁照会長、日本医療法人協会が参加・協力を決定したAMAT拠点病院に連絡、派遣要請を検討。

●4月15日

▽加納繁照会長、西澤寛俊・全日本病院協会会長と協議のうえ、医法協・全日病共同の災害対策本部を設置。

▽熊本県下の会員病院に被害状況調査のためFAXを送付。益城町の益城病院と電話・FAXがとれず。その他の会員は医療提供体制に重度の影響を受けたのが1法人、警備な影響を受けたのが4法人、建物に軽微な影響が17法人あることがわかった。

●4月16日

▽1時25分 熊本県熊本地方でマグニチュード7.3、震度7の地震発生。

▽震度5以上を観測した福岡、佐賀、長崎、大分、宮崎県下の該当市町村に医療施設を有する会員病院32病院に被害情報調査のためFAXを送付。13時現在、福岡県で医療機器に一部影響のある1法人、佐賀県で建物に軽微影響のある1法人、宮崎県で建物に軽微影響のある2法人と水道停止がある1法人があることがわかった。

▽熊本県下の会員病院に対して被害状況調査(第2報)を送付。

▽伊藤伸一会長代行が熊本県支部の金澤知徳支部長・常務理事に被害状況を聞き取り。

▽伊藤会長代行より田丸丸中央病院の鬼塚一郎院長に同院を支援拠点として熊本県下各病院に飲料水と食糧を提供する支援拠点とすることを要請。全会員に提供を要請。

▽伊藤会長代行、深夜に青磁野リハビリテーション病院に到着。

▽伊藤会長代行より杉常務理事より支援要請を受け、金澤常務理事に連絡を取り、必要な物資の種類および量について要請。

●4月17日

▽8時20分 全日本病院協会スタッフ2人が青磁野リハビリテーション病院に到着。2トン車に飲料水、食糧を持って到着。

▽10時 先着の白鬚橋病院AMAT、全日本病院協会スタッフ、青磁野リハビリテーション病院、大雄会スタッフで打ち合わせ。白鬚橋病院AMATは医療支援、大雄会は物資支援を行う。協会の支援物資は菊南病院、くまもと成仁病院に分散されて配布。

▽13時 伊藤会長代行、菊南病院へ物資の確認に出発。

▽15時 伊藤会長代行、青磁野リハビリテーション病院を出発。帰路。

▽15時30分 ファインテラスせいじのに届いた物資の仕分け、納品表を作成。

▽16時 周辺病院に飲料水などの物資を提供。

●4月18日

▽午前中 日本医療法人協会、全日本病院協会での医療支援の必要な病院の調査を開始。

▽物資搬送の連絡がいろいろなところから届く。ただし到着時刻や物資の量などは不確か。関係者が複数に渡ったこともあり情報が錯そう。

▽14時 安藤高朗常務理事(永生会理事長)が青磁野リハビリテーション病院到着。

▽16時 被災者健康支援連絡協議会開催。清賢二事務局長が出席。

▽21時30分 杉循環器内科病院手配の物資が4トン車2台で到着。

●4月19日

▽次々に支援物資が届くと連絡が入り、物資の保管場所が不足。会員病院に連絡を取り、物資を取りに来てもらうことにする。その際に病院の情報も報告。

●4月20日

▽会員向けに提供を要請していた飲料水、食糧の提供要請をいったん中止し、以下の物資提供を依頼する。

①調理済み缶詰、②おかゆ、③果物(常温保存可能で日持ちするもの)、④使い捨てのコップ、皿、⑤菓子類、⑥生理用品、⑦ウェットティッシュ、⑧ドライシャンプー、⑨ボディ用ウェットタオル、⑩乾電池、⑪トイレットペーパー。

▽金澤常務理事より事務局と加納会長に携帯電話にて現状報告をいただく。物資等はインフラがまだ不十分な状況であるが、支援物資によりなんとか十分量を確保しつつあること。今後は避難所など周辺地域を含め医療支援を行っていくこととしているとした。

●4月23日

▽加納会長が熊本入りし、支援物資の提供・現状調査を行った。